

大川小事故検証「事実情報に関するとりまとめ」に基づく意見

① 意見者に関する情報

氏名	
住所	
職業	
連絡先 メールアドレス	

② 意見の内容

(a) 「事実情報に関するとりまとめ」に追記・修正が必要と考えられる事実情報、及びその根拠となる情報

追記・修正が必要な事実情報	その根拠となる情報
1. 大川小被害状況の報告内容と震災当日からの経緯。また生存教諭の証言。 2. 校庭に留まる判断を下した経緯と、学校から僅かな距離にある裏山に避難誘導しなかった原因。 3. 被災した数ある学校の中で、全児童の7割もの犠牲者を出した大川小独自の原因。 4. 地域住民が集めた膨大な情報。	平成24年10月28日付けで遺族らによって作成されている「平成23年3月11日午後2時46分から3時37分までの動き」 また詳細綿密な情報をもとに報道している河北新報などを代表する各種媒体。 ドキュメンタリー映画「3.11」「津波のあとで」などの記録。

(b) 事故の原因や今後の再発防止対策のあり方について

校長不在という、特別ではなくむしろ普通の状況において、意思決定・判断の一切をもなかつたことは異常な事態である。しかしこれは端的に学校長、または良心の呵責に苛まされていると思しき生存教諭への風当たりではなく、管理と称して責任の全てを吸い上げてしまった学校体制にある。末端の教員に意志・判断を少しも任さず、つまりは教職員一人ひとりを信頼せず、管理管理と責任があるように見せかけ、その実、事が起きた際には保身と言われても仕方がないような曖昧な対応となれば、どうしてこの学校へ我が子を、いや将来を背負う子ども達を預けるものかと考えようか。また同時に教育という誇らしい大志を持ちながらその職に就いた者にとっては、まるで夢を奪われたかのように、前途を悲観する以外何ものでもない状況を作り出している。ここから生まれる必至の発想は、“何もしない・何も言わない方が得策”である。

再発防止に必要な“事始め”は、すべからず事実を明らかにするべきと考えます。状況整理なくして改善なし、現在なくして未来なし、です。これさえ、いやこの最重要点さえ行えば、自ずと再発防止策となりましょう。

【 今後の検証委員会のあり方 】

(a) 検証の意義と必要性

- ① 全児童 106 名のうち 7 割にあたる 74 名が犠牲になったという、過去に類を見ない甚大な事故であるという点。
- ② 児童でも走って 1 分という高台である裏山に逃げなかったのはなぜかという点。
- ③ 学校管理化で起きた重大事故であるという点。
- ④ 多くの被災した学校の中で、大川小だけがこれだけの惨事となったのはどうしてかという点。

(b) 「事実情報に関するとりまとめ」およびこれまでの検証内容

- ・ 防災マニュアルの整備状況および教職員の意識調査
- ・ 津波到達の経路と時刻。および水位
- ・ 周辺地域の被害状況
- ・ 当日の避難行動

(c) 今後の検証委員会の「検証」のあり方について

学校管理化に於いて 7 割もの児童、加えて 10 名の教職員が犠牲になったという惨劇は、未曾有の災害とは言えても防げなかった事故とまでは言えない。何故なら多くの保護者が持つ「学校にいるから大丈夫」という、ごく普遍的な認識とともに、すぐ近くに容易に避難できる高台があったからである。世間の耳目もここに集中している。教育委員会もしくは文部科学省は、ここまでの報道や関心、そして今後の影響を熟考しなければいけないだろう。しかし間もなく終結する予定の検証委員会は、前出の意義と必要性に対して、これまでの検証内容は完全に的外れ、それどころか検証の本質を疑うものとなっていると言わざるを得ない。それは早い段階から膨大な情報を収集している遺族の方々、そこに含まれる地域住民の目撃証言や生存児童の聞き取り、生々しくも重要に値するこれらの資料を“検証”しようとしめない委員会とは、果たして何を持って検証と呼ぶのかと疑うのも無理はない。遺族であろうが何であろうが、学校が安心して預けられる場所であった筈という根本を質さない限り、教育に限らず社会において禍根を残す事となり得るのである。ひいては未来のある、次世代の子ども達の死に報いるためにも、先に死ぬべき我々大人たちが果たす役割を検証しなくてはならない…これが本来の検証委員会の重責ではないだろうか…。

難しい事情はあるでしょう。しかし真の先人とは志を持ち、妥協せず、未来に亘って誇れる精神の持ち主なのです。これは学歴も財産も関係なく、誰でもその意気さえあれば出来る偉業なのです。委員会の姿勢は犠牲になった子ども達への供養でもあり、今後の学校史への先鞭となるでしょう。子ども、未来、我が役目…これらを見定めれば、選択を怠ることはないと思います。

委員会の皆さま、今そこにいる、今のあなた方ではなく、未来つまり交代する世代を見据えた姿勢で臨んで下さい。心よりよろしくお頼みいたします。

ご意見19

①意見者の情報

氏名：

住所：

職業：

連絡先：

②意見の内容

大川小学校の支援に関わっておられる方々から話を直接聴くことができました。同じ子どもを持つ親として、事実を知りたいだけなのに何故公表されないのか。知ることができないというのは苦しいものがあると想像できます。難しい意見は書くことができませんが、「事実情報に関するとりまとめ」を読んで思ったことを述べさせていただきます。

1、3、2、4 大川小学校の避難行動における経過

(3) 学校における動き

この部分が、一番知りたいことだと思います。私が聴いた話しや先生の手記（新聞掲載）などにかかれていることが書かれていません。ある先生は高台へ避難するように声をかけられたようです。それなのにその声かけがどうして届かなかったのか。子どもたちが長い時間、運動場に待機させられ、その間先生方は何をされていたのか、このとりまとめではわかりません。

2、助かった人達の証言が詳しく掲載されていません。聞きとり調査をされているので、助かった教師や生徒にも聞きとりをされたと思います。その人々の証言がありません。これから同じことが起きないようにするために生存者の証言は大切だと思います。私は公表することが大事だと思います。

3、被災後の子どもたちや教職員その家族に対する精神的なケアはなされているのでしょうか。これだけ大きな被害が出ました。一緒に生活していた人々の精神的なダメージはいかばかりでしょうか。事故に関連してその状況報告もして欲しいと思います。

ご意見20

1 意見者に関する情報



2 意見の内容 (b) についてのみ

直近の委員会は、一般論の議論が多かったようですが、それはそれで参考になる意見はあったと思います。

問題は、拙速に、あとわずかの委員会でもって、この検証を終わらせてしまうことだと思います。

遺族や関係者、委員など、皆さん全員が納得いく形で検証をまとめることを主眼にすべきだと思います。

特に、あの日に何が起きたのかという事実を明らかにする点については、俎上に乗せる一次的情報からなるべく公開し、それにどういう評価軸でもってグレードを付けるのかという基準・プロセスを公開・共有すべきだと思います。それによって、事実解明についてどこまでが限界なのかも共有できると思いますし、相反する事実も可能

性がどちらもあるなら併記してまとめることで、次のステップに進めると思います。

検証作業はいつまでも続ける訳にはいかないのですが、多くの関係者が納得いくプロセスを進めて行く中で、収束していく時期も全員の納得の上で決めていけばよいと思います。

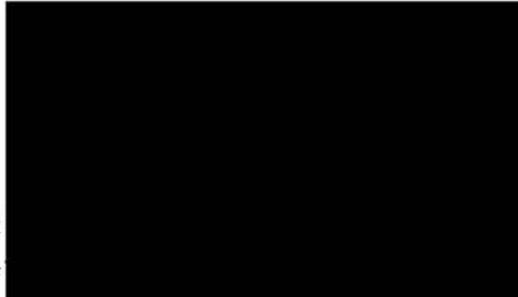
以上

大川小学校事故検証「事実情報に関するとりまとめ」に基づく意見

① 意見者に関する情報

氏名：
住所：

職業：
連絡先
メール



② 意見の内容

(a) 「事実情報に関するとりまとめ」に追記・修正が必要と考えられる事実情報、及びその根源となる情報

A【追記・修正が必要と考えられる事実情報】

B【その根拠となる情報】

- I. A スクールバスの運転と同バス会社のバス無線同士の交信証言の聴き取り調査の不備。
B 震災後にバス会社の従業員家族がスクールバスの運転手と他のスクールバスの運転手同士バスの無線で非難を促した証言がある。
- II. A 新北上大橋が一時的に瓦礫でダムの様になり、北上町側の橋を流出したのと釜谷側の新北上川の堤防を越流した津波が第3波だったと証言している水辺センターの展望台で生き残った生存者からの聴き取りの不備。
B 生存証言者が複数いると情報を提供しているのに、委員会のデータを強調して聞き取り調査を行っていない。この生存者の証言は被災当日自分の母が、流出した新北上大橋の水辺センターに明るいうちに徒歩で北上中学校周辺より歩いていき直接聞いている証言である。あの水辺センターでの生存者こそ当時の川の挙動を見ていたはずであるので、聴き取り調査の不備がある。
- III. A 校庭に校舎から非難している時の、児童の危機感の無さを強調している。
B [Redacted] の証言で震災直後校庭での様子を泣いている児童や地震酔い（嘔吐）している児童もいたと何度も同じ証言があるのに、児童に聴き取り証言でゲームや漫画の事など日常会話をしていたと記載されているが、これはあり得ない話だ！校庭の樹木で遊び始めた児童など当時いないと [Redacted] も証言している。

IV. A 児童らが非難している間にも陸上を遡上し続けてきた津波は突風のような風を巻き起こし、家々を破壊する大きな音を立てながら大川小学校付近に到達し、
一帯は壊滅的な被害を受けた。とあるが、間違いである。

B

(b) 事故要因や今後の再発防止あり方について

・事故の要因は、報連相をせずに実施もせずにペーパーだけのものになっていた『津波を想定した避難訓練』をしてさえいれば、校庭に避難していて、情報や手段がありながら、50分も避難行動をしないなんてあり得ないです。

報告：防災会議で行われた事を教職員全体で共有していれば、話し合いに時間を要さない。

連絡：津波を想定した訓練の案内すら学校から渡されなければ、「引き渡し」の言葉の意味すら当時の大川小学校の親は知らない。(震災後に知った。)

相談：津波を想定した訓練を実践し、何度も不具合箇所を参加者で話し合っていれば改善され少なくとも「三角地帯」という、津波が来ているのに川の傍に移動する行動すらなかった。

情報：先生方が校庭の式台の上にラジオを置いて聞いていた証言があるのに、備品リストにラジオは無かった・・・なんてお粗末な検証はあり得ない！未だに被災した大川小学校の職員室には当時4年生が歌の練習に使っていたCDラジカセがあります。

手段：スクールバスが県道を長面方向へ向いていたのを学校の門から昇降口までバックして、運転者は避難行動待ちであった。バスに児童を乗せてピストン輸送すれば地域のお年寄りだって助けられた筈だ！

・地域の住民の危機感の無さとまとめているが、学校が早い段階で最悪を想定して避難行動をとっていれば地域住民だって「小学校が山に登ったから・・・」と、危機感を持ち始め避難行動を開始した筈である。学校管理下で起きたこの悲劇を地域住民が原因だ等と検証委員会がまとめあげたら大変な事になる。事後においての検証は石巻市教委だけでなく、県教委、文科省にも問題が出てきている今、よく考えて事後は扱ってほしい。2年8か月経っても自分達遺族は子供を亡くした悲しみの上に、更に追い打ちを掛けて行政を守る為に国にまで裏切られ続けている。もうやめてくれ・・・

・・・これでは、また同じ悲劇が起き、自分たちと同じ思いをする事が繰り返される・・・

ご意見22

①意見者に関する情報

氏名

住所

職業

連絡先

電話番号

メールアドレス

②意見の内容

(b)事故の要因や今後の再発防止対策のあり方について

検証とは、何を検証し、未来に何を伝えていくためのものなのでしょうか。

学校で集団で動くとき、その担当教師が中心になって動かします。

避難の場合、安全防災担当主任が中心になるかと思います。

もちろん、このような緊急時の場合、最終判断は校長です。

あの時、きっと、先生達の中には山の方が良いのではと思った人もいたのではないのでしょうか？

でも、言えなかった、全体の判断は、あの橋の上だった。

もし、強い先生だったら、「いやこっちが良い」と押し切れたかもしれません。

しかし、それは、人となりで出来る人・出来ない人がいると思います。

どちらも自分の命もかかっているのですから、いい加減なことはしないと思います。

もし、まあ、大丈夫だろうと思っていたとしての判断だったら、事の深刻さが十分伝わっていなかったのでしょうか。やはり判断ミスなのでしょう。

では、その判断を支える知識は、先生達はどうやって手に入れておかなければいけなかったのか？

どうやって授けられていなければならなかったのか？

誰が授けなければならなかったのか？ではないでしょうか。

想定外だったと言われる津波で、専門でもない一教師達に正しい判断をしろと言うのがどだい無理な話なのではないでしょうか。

自然災害のニュースをみるといつも思うことなのですが、専門家の方達は、此処の地形はコウコウで非常に危険地域とか言われる。

思わず「早く教えといてよ！」と叫んでいます。

また、空からの映像や地図を見ると、なるほどという地形だったりします。

そういう情報というのは、住民はどうやって知ればいいのか？

私は、家を建てる時（大震災以前のことで）、

図書館へ行って、色々な災害地図で断層の場所など色々調べましたが、普通の人はあまりそこまではされないのでしょう。

最近では、ハザードマップが各家庭に配布されますが、ただ配ってそのままじゃ、やはり見ない人は見ません。

特に、学校には、積極的に情報を教えて欲しいです。

確か、どこかの地域では、大学の先生の研究で日頃から緊急避難の方法など学習していて、その通りに避難誘導できて、地域みんなが助かったとかいう報道があったと思います。

そういうことって、もっと出来ないのでしょうか？

専門家の知識を、聴かれたときだけじゃなく、積極的に伝えることは出来ませんか？

そんな仕組みは構築来ませんか？

誰が、どう動けば出来るのですか？

責任を追及するのが目的ではなく、まして、言い訳を繕うためのものでなく、何が間違いだったのかを見つけ、何故間違ったのか、ではどうすればいいのか、未来において、二度と間違いを繰り返さないで済む方法を考えるための検証会であって欲しいと願っています。

事情をよくも知らない外野が言いたいことを申しました。

しかし、学校現場にいて、子ども達の命を預かる者として、遠く離れた関係ないことではありません。

本校でも、年に3回、3種類の避難訓練をしますが、訓練のための訓練になってないか、いつも考えています。そして、訓練で想定しないことは、頭の中でシミュレーションしています。

ことある毎にそうしていますが、やはり実際に動いていなければ咄嗟に行動できないだろうとは思っています。

専門家のアドバイス（監修）の基に訓練が出来たら良いのではと思います。

各学校が働きかけるには限界があります。

文科省なりの大号令で、大学の専門家が各小中高、学校に対して地形的にどんな災害に注意しなくてはいけないのか、そして、自然災害時には、どの様に避難しなければならないのかを授けて欲しいです。

この検証会の中身とは外れていますか？

大川小のことだけに留まらず、全ての災害時に正しい判断が出来、子ども達の命を守ることが出来るように考えていくことが亡くなった命へのせめてもの報いではないかと思い、拙い思いを綴らせていただきました。

失礼いたしました。

ご意見23

大川小学校事故検証「事実情報に関するとりまとめ」に基づく意見

①意見者に関する情報

氏名	[Redacted]	
住所		
職業（具体的に）		
連絡先 電話番号 又はメールアドレス		

②意見の内容

- (a) 「事実情報に関するとりまとめ」に追記・修正が必要と考えられる事実情報、及びその根拠となる情報

(b) 事故の要因や今後の再発防止対策のあり方について

平成25年11月3日配付の資料2「事故要因の分析と今後の再発防止対策について」の一部疑問点

1 避難手段・避難先

- ①「裏山を避難先とできず」は「裏山を避難先とせず」とすべきではないか。
- ②「裏山への避難路なし」は意味不明である。書き直しが必要と考える。

理由

- ①については物理的に出来なかった証拠はなく、だれも確かめていない話が独り歩きしたと言えるため。
- ②については、「とりまとめ」P33で裏山をせっかく3種類に細分しているにもかかわらず、資料2では「裏山」と一括されており、それにより矛盾を生じているため。

「裏山への避難路」の意味が分からない。

裏山は学校の校地外であるからそこへの一般道が存在する。避難路は存在する。

「避難路」を「裏山という高い部分へ登る道」という意味に使っているなら、避難路が存在しないのは、B：土留め工事をされた場所だけが該当する。

A：ポンプ小屋の付近から登る山、C：体育館の裏手の山 はともに杉林の中に道が存在し登ることができる。特にCは傾斜の緩やかさと「シイタケ実習」による認知度の高さから言って避難に最適な場所だったと考えられる。

校長が「裏山に道がほしい」という意味のことを言っていた、と報道で読んだが、それはBの斜面についてである。校長はBの斜面に上り、校舎の写真撮影をしていたことがある。

以上により、「裏山への避難路なし」は書き直しが必要と考えます。

2 避難の意思決定

「話し合いで緊急決断が下せず、人間関係重視型の組織運営」

と聞くと、意見が百出して、まとまらなかった、というように聞こえるが、果たしてそうだろうか。寧ろ若い人が自分の意見を言いづらい職場だったのではないか。

- ①自分の教職経験から言って、職員が年齢や経験年数の区別なく忌憚なく自分の意見を発言できる職場の雰囲気が大変大切で、それにより大きなミスを未然に防ぐことができる。そういう視点も大川小学校の検証に加えてほしいと思います。
- ②教務主任も「山へ登れ」と児童に叫んでいたし、教頭も山へ登ることを考えていた。学校の中核の二人が自分の考えを実現できなかったのはなぜか。管理職は職員の意見を聞いたうえで、リーダーシップを発揮して自分で決断することが大切。それが欠けていた。「人間関係重視型」という言葉が適切かどうかご検討ください。

ご意見24

東京都練馬区で防災教育の活動をしております[REDACTED]と申します。

表題の件につきまして、一言意見を書かせていただきます。

検証委員会の発表を拝見しておりますと、ご遺族の方の知りたいことについてはいつもふれられていないように思います。

大川小学校に関する記事によれば、「ここにいたら死んでしまう」などの児童の証言も出ているはずですが、それはどうなっているのでしょうか。

<http://diamond.jp/articles/-/43371>

検証委員会の発表を見ていると「仕方がなかった」というようなことでご遺族を納得させようとしているのではないかとさえ感じてしまいます。

なぜ子ども達は死ななければならなかったのか。

本当に助かる命はなかったのか。

現場をあずかる教職員の方々は、子ども達を守るために最善を尽くしたのか。

それがこの結果なのか。

ご遺族の方々はそこが知りたいのではないですか？

私も子を持つ親としてそこが知りたいです。

委員の皆様を攻撃するつもりはありません。

助かる命があったのではないのでしょうか。

大川小学校で手を合わせたとき、なぜ裏山に逃げなかったのか、どうしてこの校庭に集まったまま命を守る行動をとらなかったのか。

そのことばかり考えました。

すぐそこに駆け上がれる山があったのに。

私達は過去の災害から学ばなければなりません。

そのために、なぜこれほど多くの命が失われなければならなかったのか。

どうぞ教えてください。

検証結果によってご遺族を苦しめるのだけは、それだけはどうぞやめてください。

検証結果が出るたびに幾度も幾度も傷ついているのではないのでしょうか。

検証委員会からの発表があるたびに、がっかりするご遺族の姿が目に見えます。

どうぞ血の通った検証をお願いいたします。

文章も書式も失礼をお許してください。

ただただ、なぜ子ども達は死ななければならなかったのか。

教えてください。

よろしくをお願いいたします。

[REDACTED]

①意見者に関する情報

氏名：
住所：
職業：
連絡先

②意見の内容

(b) 事故の要因や今後の再発防止策のあり方について

はじめに

私は宮城県名取市の沿岸で心療内科のクリニックを営む医師の[REDACTED]と申します。津波で被災しましたが、建物とスタッフが残ったため、翌3月12日より2ヶ月間24時間病院を開け続け、緊急救援を行うと同時に、「心のケア」として800人を超える被災したみなさんの外来を受け入れ、カウンセリングを中心とした治療を行ってきました。同時に名取市内の被災した児童を対象に「心理社会的ケア」を続け、PTSDの予防のための活動を行ってきました。

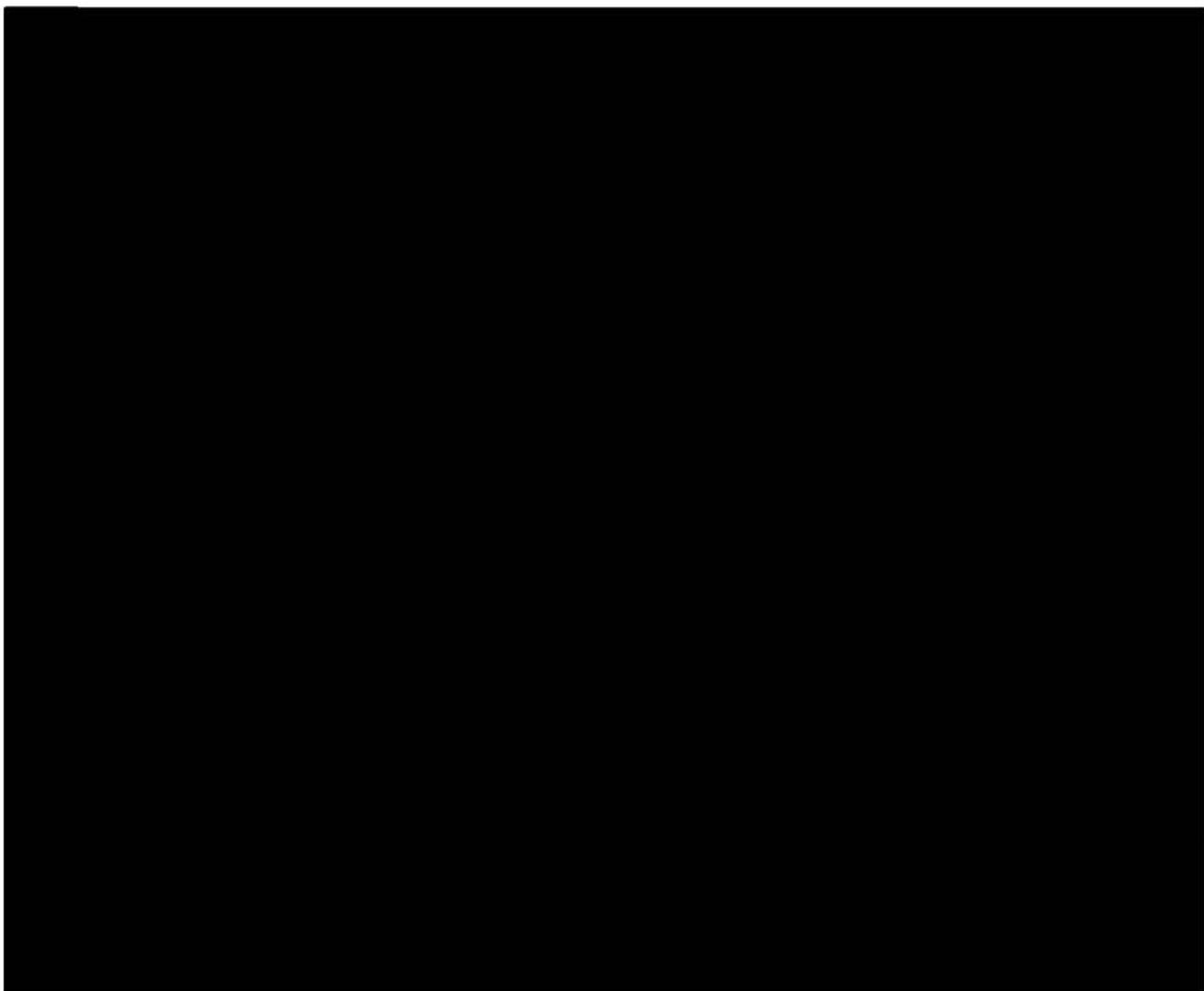
その被災した心療内科医が、今回の大川小学校の件について意見を述べさせていただきます。

PTSDへの誤解

日本においてはPTSD（心的外傷後ストレス障がい）に対する大きな誤解があるように思います。「放っておけばやがて忘れる」という誤った考えをしがちな人は、放っておくことでPTSDになる可能性が高いと思われます。なぜなら、心的外傷の後遺症という形で現れるPTSDは、語ることでその予防を行うという重大な理論が日本に上手く伝わっていないからです。

今回のような未曾有の出来事によってもたらされた心的外傷は、決して放っておけば忘れるようなものではなく、放っておくことで重大な精神病になる可能性を秘めています。従って心的外傷を受けた人々は一様に語り、物語として紡ぎ出し、人々とその物語を共有して回復していく必要があります。それはボストン在住の精神科医Judith. L. Hermanの著書「Trauma and Recovery（邦題“心的外傷と回復”中井久夫訳。みすず書房）」に明記されており、いまや世界の標準として治療の構築に利用されています。

従って、「もうあの時のことは考えたくはない」「思い出したくもない」という人こそしっかりと向き合う機会を提供され、語る場所を持たなければなりません。さもないと3年以内にPTSDの症状が発現し、重大な症状と共に社会生活そのものが脅かされる可能性があります。だから、現時点ですべての人は「語る」べき時期に来ているとって過言ではありません。



再外傷体験 (Re-traumatization)

今ご遺族のみなさんは再外傷体験に苦しんでおられます。それは、誠意のない事後の対応をし続けている教育委員会など公的機関の態度、遺族の目線に立つことの出来ていない検証委員会の姿勢などによって、再び傷つくという体験をしてしまっているからです。わが子を亡くしたという強い心的外傷に加えて、その後の対応の不備により多重に傷つくという経験は避けなければなりません。

なぜ、検証委員会の姿勢によって再外傷体験をしてしまっているのか。その一つに偏重した「匿名性」があります。検証委員会は教諭の名前を「A」や「D」などと表記したり、証言者の氏名を削除したり、あげくには貴重な証言を行った生き残り児童の■■■■君に対し、



などと言いつつ事態まで目の当たりにしてきました。この「匿名性」とは一体どのような意味があるのでしょうか。精神医学的な視点に立てばこれは「再外傷体験」そのものになっています。

誰がいつなんと言ったのか。誰がどんなことをどう証言したのか。それを固有名詞と共に多くの当事者同士で共有することが重要です。そういった共有の姿勢がどれほど精神的な安定につながるのか、検証委員会は全くわかっていないと言わざるをえません。ここに、「心のケアの専門家が委員の中に全く存在しない」という弱点が露呈しているのです。

今こそ、委員の中に「心の専門家」を

しっかりとしたPTSDや心のケアの実践経験を有する精神科医や心療内科医が委員の中に存在し、常に「ご遺族の心のケアをどうするか」という視点で監視していく必要があると思われます。この点をしっかり押さえていないが故に、多重にご遺族を傷つけ、反発を買い、結局この「検証」という動きそのものを無意味なものにしてしまいかねません。

いまこそ「心のケア」の視点を導入し、経験豊かな、しかも被災経験と被災者の診療を日々行っている精神科医ないしは心療内科医を委員の中におくべきです。

最終的なゴール

この検証は本来、ご遺族の皆様の「本当のことを知りたい」という切なる願いから始まったものです。その原点に還って考えれば、ご遺族の目線で思考することが重要です。それは決してご遺族の意向にすべて沿って、例えば事実を曲げてほしいなどという意味ではなく、どんな厳しい事実でも「本当のことを追求する姿勢」で臨んでほしいという意味だと思います。それがしっかりと白日の下にさらされれば、ご遺族はある意味納得されて次のステップに進まれると思います。

そのためには

- ・ 教諭の証言を早急に実施する必要がある。
- ・ 教諭のPTSD予防や、治療について同時進行する必要があるので、主治医を変更するべきである。
- ・ 生き残った児童の証言を実名で公表し、それ以外の証言も極力匿名性を省き、有名性を重要視して証言を組み直すべきである。

これらの点が重要であると思います。

終わりに

心療内科医としてこれ以上ご遺族が傷つくことを容認することはできません。

被災し、被災されたみなさんと共に被災地で活動してきた、心療内科医の切なる意見をどうぞ共有して頂きたく思います。

私の名前や所属を匿名性するべきではありません。なぜなら、有名性にすることで自分の発言に責任を持つようになるのが人間であり、その責任の所在を明らかにしていくことが「検証」だと思うからです。「プライバシーの保護」を謳いすぎて、より不透明な検証になっていることにそろそろ気づくべきではないでしょうか。

何に気を遣って匿名性を導入しているのか、私にはどうも理解できません。匿名でしか話せない人物の証言を有用とするべきではない。なぜならば匿名性を要求している時点で「向き合っていない」からです。

今こそ関係したものすべてが名前やその存在を明らかにして、真実を語るべき時期です。それがすなわち「心のケア」に直結しています。

そして、志半ばで次の世界に旅立っていった若き小学生たちに恥じないような責任を果たすべきです。私たちは生きている責任を全うすべき「大人」なのですから。


2013年11月11日